「地域の絆で防ぐ災害」

北杜市立甲陵中学校　三年　廣岡　修作

土砂災害は年々増えている。昨年、令和元年の全国の土砂災害発生件数は一九九六件。死者、行方不明者は二三名、人家はもも戸が全壊している。私達には、何ができるだろうか。私は地域とのつながりをもつことだと思う。

私はもとより、自然災害が防げるとは思わない。いくら知恵をしぼり、技術で防ごうとしても、自然はそれをはるかに超えた災害をもたらす。それも突然。これらのことから、土砂災害をふくむ自然災害を完全に防ぐのは、不可能であると思う。私達人間が出来るのは、災害を起こさせないことではなく、起きた災害に対してすぐに対応し、災害による被害を少しでも減らすことなのだ。

土砂災害の恐ろしさは、その突然さ、範囲、パワー、そして一度埋もれてしまうと救出が難かしい点だろう。ふたたび土砂がくずれる

危険な天候、救助する人の到着に時間がかかるなどの問題があるからだ。しかし一つだけ、土砂災害の被害を最少限におさえることのできる方法がある。その土地に暮らす人々、地域の人たちの連携だ。

危ない土地のことは、その土地に暮らす人が一番良く知っている。崖崩れや土砂災害の被害にあうところに住んでいるのは誰か。避難に時間のかかる人は誰か。避難所に来ていないのは誰か。分かるのは、地域の人たちだけだ。行政の手の届かないより細かなところまで気をつかえるのだ。

この「共助」によって人の命が救われた例が存在する。平成七年の、阪神・あわじ大震災である。ある調査によれば、倒壊した建物から救出された人のうち、八割が家族で近所の住民によって救助されたとされる。すぐには行政が救助にむかえないなかで、地域の協力が、人命を救ったのだ。また、平成二十三年の東日本大震災では、近所の人達で協力し

てまわりに警告を発して、無事に避難することができたという話もある。

では実際に同じようなことが、土砂災害で行えるだろうか。震災のときのように、巻き込まれた人を救助することは難かしいと考える。土砂災害は多くの場合、原因は降り続く雨や豪雨だ。災害が起こった時点で救助活動を行おうとすると、雨のゆで活動することになる。いつまた崩れるか分からないところでの作業は、危険がともなう。さらに多くの命が失われる可能性さえあるなか、救助活動は得策とは言えないだろう。

出来ることは東日本大震災の例のような、近所、地域での行動である。地震と異なり、土砂災害はその兆候をとらえることができる。自分達の町が大雨になるという予報を見たら、まわりの人に伝える。危険だと感じたら、周りに避難を呼びかける。一人一人が実行すれば、災害の被害を食い止める力になると思う。

みなさんは地域の防災訓練に参加したこと

はあるだろうか。私の地域では、年に数回行われている。主な活動は、無線での避難、放水訓練、消火訓練、非難所である公民館の設備の使い方のレクチャーだ。ここで疑問が生まれる。この訓練は土砂災害に対応できるだろうか。たしかに震災の時には効果的だろう。しかし土砂災害や豪雨の際には、防災無線の音が聞こえるとは考えにくい。土砂災害が身近になりつつあるなか、私は危機感を感じる。ではどうすれば良いのか。私は防災訓練の際に地域のみんなで防災ハザードマップを確認し、誰がどこに住んでいるのか印をつければ良いと考える。支援が必要な人、体力に自信がない人、災害が起こりやすい地域に暮らす人の情報を地域で共有し、「地域のネットワーク」の網をはっておく。そうすればもしもの時にも、すばやく行動できるのではないだろうか。人という文字は、二本が共に支えあって成り立っている漢字だと言われる。一人では弱くても、協力すれば大きな力になれ

るはずだ。

地域のつながりが薄れつつある。祭りや行事が無くなると、それを通じた関係も消えてしまう。地域のつながりは、自分達の命を守ることにつながるということも、頭のすみにおいておきたい。